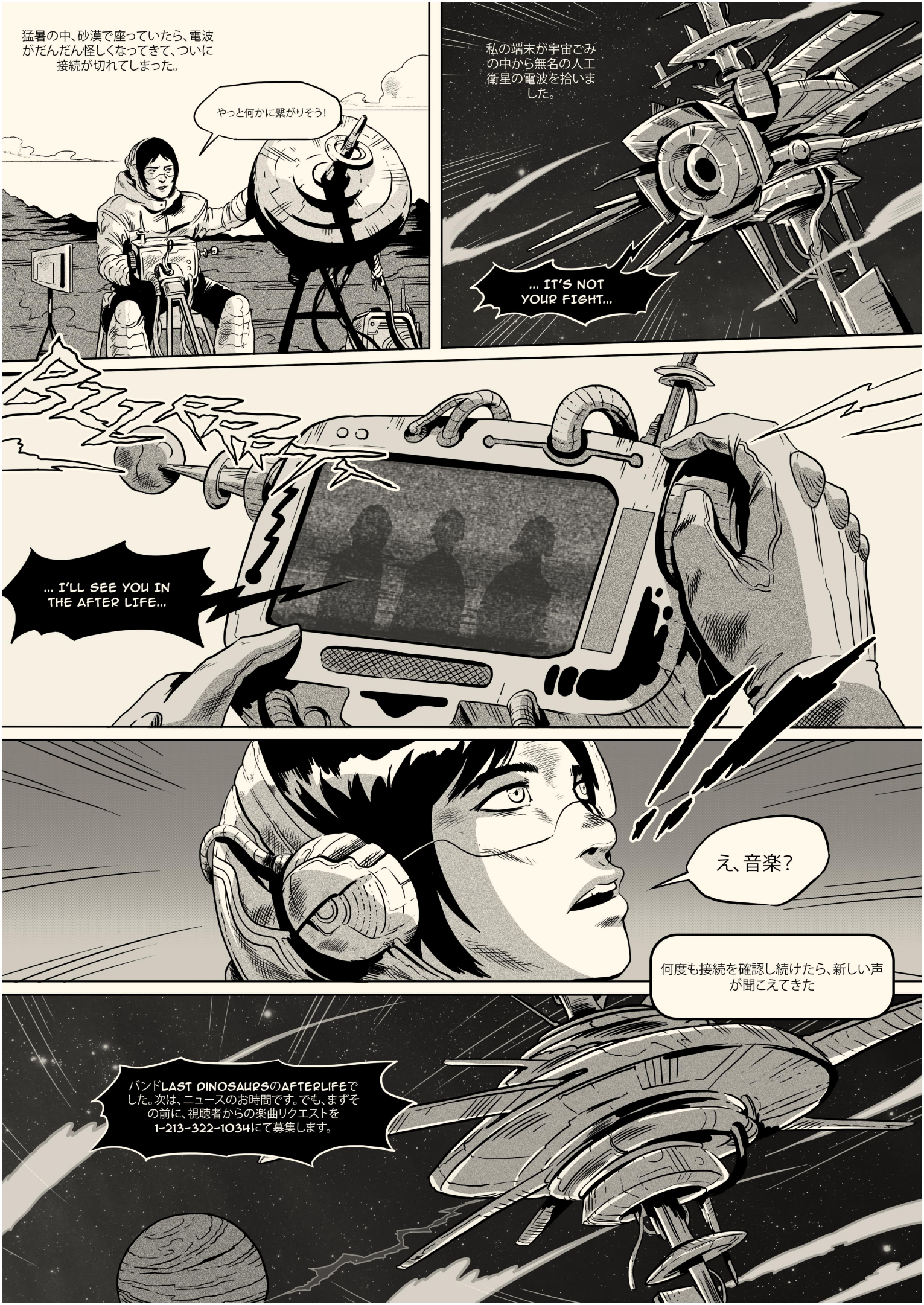

猛暑の中、砂漠で座っていたら、電波がだんだん怪しくなってきて、ついに接続が切れてしまった。
やっと何かに繋がりそう!
私の端末が宇宙ごみの中から無名の人工衛星の電波を拾いました。
... IT'S NOT YOUR FIGHT...
... I'LL SEE YOU IN THE AFTER LIFE...
え、音楽?
何度も接続を確認し続けたら、新しい声が聞こえてきた
バンドLAST DINOSAURSのAFTERLIFEでした。次は、ニュースのお時間です。でも、まずその前に、視聴者からの楽曲リクエストを1-213-322-1034にて募集します。

ホストの声に驚き、接続を失ってしまう前に急いで電話してみた。繋がった先から声は聞こえなかったが、ビープ音が流れたので、自分のリクエストを伝えた。声が届きますように。

エリックと申します。LAST DINOSAURSのAFTERLIFEを聴きたいです。

アンコールを求められているみたいです！視聴者の声に応えて、LAST DINOSAURSのAFTERLIFEをもう一度流します。チャンネルはそのままで、LAST DINOSAURSをお楽しみに！

人工衛星からまた同じ曲が流れた。大昔の曲調みたいだけど、歌詞が心に響いてくる。久しぶりに、時間を無駄遣いしていない気がした。

ずっと観測してきた時間が無駄じゃなかったかも。誰が、なぜ、こんな不思議な音楽を流しているんだろう？

エリックは、何日もその同じ人工衛星を観測し続けたら、その衛星が大災害前の音楽を放送していることに気づいた。

ホストの声は人間っぽかったけど、エリックは*AI*だと気づいていた。タイム・カプセルかな？どういうことだろう？

世界中のエリックみたいな観測者たちは、いつかケスラー大災害前の古代衛星から貴重な情報を回収することを夢見て、端末を空に向け続けています

エリックは自分がこの上なく最強なAIを発見したことにまだ気づいていません。

いくら電熱ジャケットを着てても、ずっと生き延びられるわけじゃない。雪が降る中、目先の景色を見ていたら、とてつもない孤独感に襲われた。もう今回は上手くいかないかも、って考え始めちゃった。

無反応なロボットを他の道具の横に放置した。衛星観測用の器具も、テントや道具も、全部あの役立たずなロボットと一緒に。そのことをあまり考えないようにした。今大事なのは、手ぶらな状態で生き残ることだ。死を覚悟して、凍った湖の上を歩き出した。

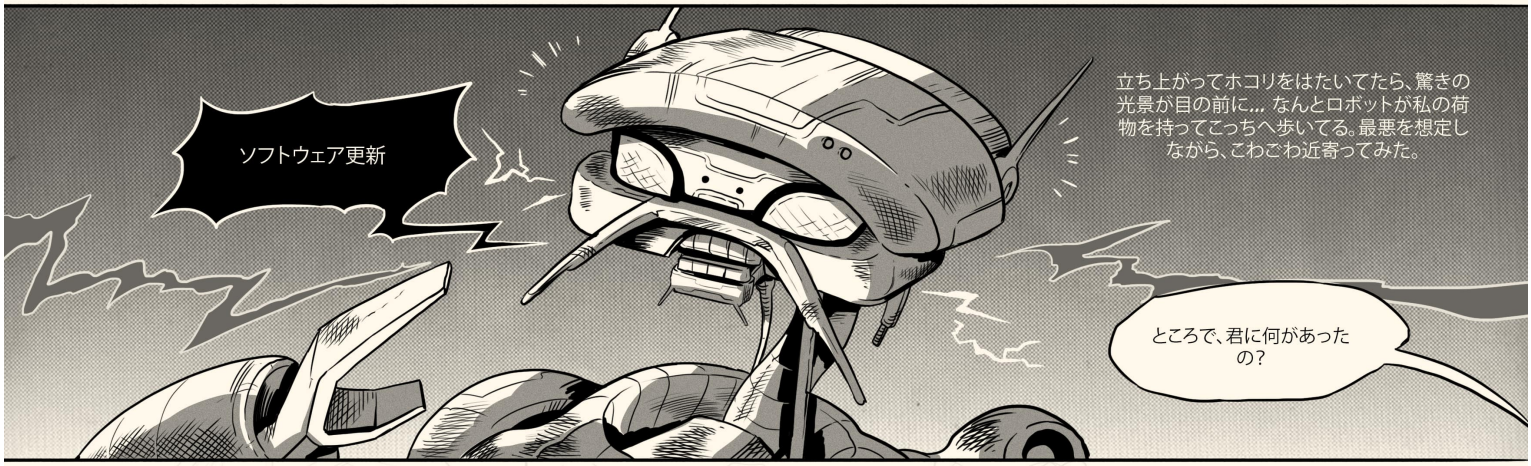
黒い鳥が前から飛んできたから私は頭を隠した。

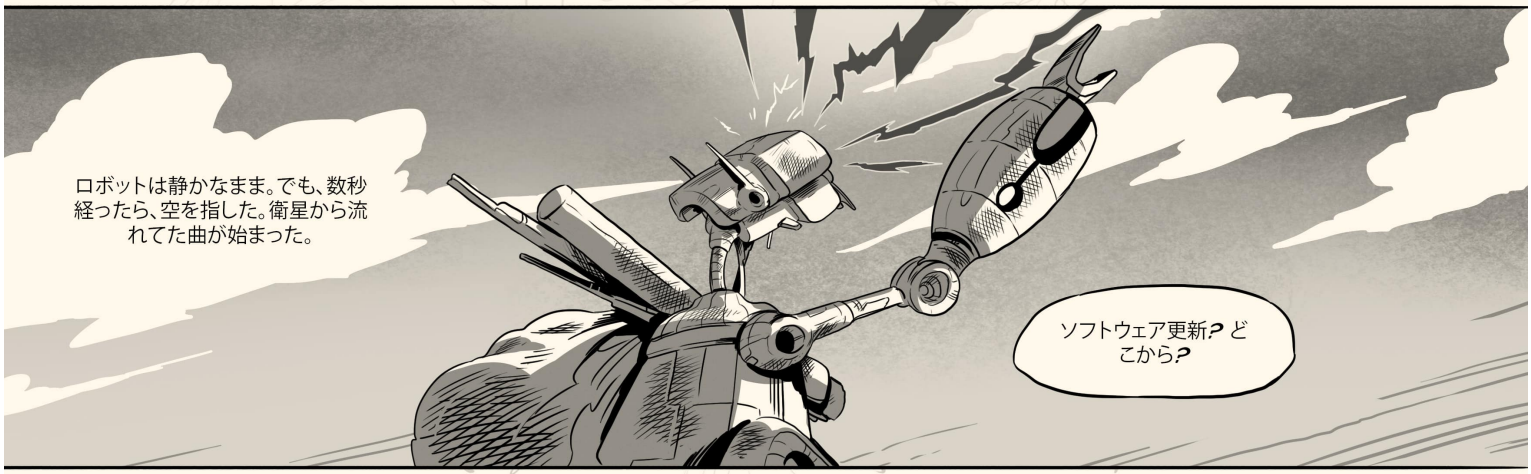
SAWW!

カラスの声が遠くから聞こえた。振り向ける間もなく、後ろから何かが突いてきた。

もう一度鳴き声が聞こえて、気づいたらカラスが私の地図を持って飛び去っていた。鳥のくちばしを掴もうとしたが、逃げられたから追いかけた。追いかけながら、自分は世の中に必要とされていないし、見捨てられたし、もう終わった、って感じた。

目の前にあった地図がどんどん遠くへ離れていくのを見ることしかできず、気づいたら氷に滑って転んでしまっていた。地面にいる自分にカラスが向かってるのが見える。手で顔を隠して、目を閉じた。赤ちゃんみたいに丸まったら、突然カラスの鳴き声と遠くへ飛んでいく音が聞こえた。隠してた顔を出して目を開けたら...



衛星は太陽や月みたいに空の一部だった。そういう意味では、オアハカの都心はあまり変わりなかった。でも、オアハカは変わっていた。伝説によると、1000年前にこの地で地下図書館が見つかったようだ。その図書館はあの大災害より前から存在していた。発掘者は、図書館にあった全ての物を盗り、彼らの子孫が今の世界のリーダーになった。

町の修理屋さんに入った。職人とその息子に挨拶した。

大丈夫です。しばらくここら辺にいようと思う。

本当にロボットと一緒じゃなくても平気ですか？

荷物が軽くなったから、ご自身で全部持てると思います

全ての荷物をカバンに入れて、彼女の言葉を脳内メモした。衛星観測者は珍しい存在で、同じ場所に揃うことはもっと珍しい。

不思議なことに、最近多くの旅人がここを訪れていて、みんなここに住み着こうとしています。

もしかしたら、みんなあの衛星のせいで頭おかしくなってるのかな？なぜか他の人も衛星観測用の道具を絶対に手放そうとしない。

もし衛星鑑測者が道具を売ろうとしていると聞いたら、様子おかしいと思ってすぐ逃げるわ。

接客ありがとうございます。また何かあったら戻ってきます。

もちろん。気をつけてらっしゃい。

さようなら！ご来店ありがとうございました！

店から出て外を歩き出したら、空が急速にどんどん暗くなっていくのに気づいた。立ち止まって空を見上げたら、月が太陽に襲いかかっていた。恐怖が体中を震わせるように走った

私は周りを見渡して、人々の反応を伺った。すぐに見覚えのある一人の顔に気づいた。

彼女は私の方を見た。そしたら、かつて私のものだったロボット犬と、それを盗んだ人が視界に入った。

日光が戻ってきた。日食について話す人も、さっさと日常に戻った人もいた。その人混みの中にはソフィアも私のロボット犬といた。

ソフィア…

エルトン！やっほー

エリック！

逃げろ…

ここの方が砂漠より全然天気がいいよね。

全然いい。

何か問題でも？

逃げろ…

な…なんか聞こえた気がする。

ここに来てからどれくらいですか？

来てから…

急に視界が眩しくなった。反射的にバッとソフィアの手を握って、修理屋さんの方へ走り出した。何も見えない中、更なる爆発によりこっちにホコリが飛んできた。

走り続けていると、だんだん視界が見えやすくなってきた。何が起きているか把握できていない中、急に空から光のビームが降ってきて、遠くの場所に当たっていた。全てのロボットが固まり、空を見上げた。ソフィアの後ろに壊れたエルトンも見えた。

分からないけど、とりあえず行こう。

衛星が聞こえたよね？

起き上がって、街中を走り出した。攻撃は止まったが、街中の人は慌てていた。走りながらめまいがして、頭がクラクラして不思議な感覚だった。そしたら、体が急に倒れ始めて、地面に当たったと同時に、ソフィアのうっすらとした消えそうな声が自分に近づいてきた。

一年前にソフィアに会った。彼女は、私が初めて会った衛星観測者だ。当時の私は地図作成者で、クライアントのためにオアハカの砂漠を記録していた。地図が終わった日に、彼女は私がキャンプしていた洞窟を訪れた。

彼女は喜んで同席してくれて、二人でいろんなお話を共有しあった。とても話しやすくて、私がオアハカに地図を持っていくと言ったら、彼女の目はキラキラした。どうやら彼女はオアハカについて詳しかったみたい。オアハカが衛星観察の発祥地であることを含み、人工衛星観察の歴史についてたくさん教えてくれた。

彼女は喜んで同席してくれて、二人でいろんなお話を共有しあった。とても話しやすくて、私がオアハカに地図を持っていくと言ったら、彼女の目はキラキラした。どうやら彼女はオアハカについて詳しかったみたい。オアハカが衛星観察の発祥地であることを含み、人工衛星観察の歴史についてたくさん教えてくれた。

現代知識の源である伝説の図書館のことや、宇宙ごみでできた障害を越えて逃げたい人々のゆるい集まりに彼女が所属していることを教えてくれた。

盛りだくさん喋り倒した。丸で二人が同じ布で出来ていたかのようだった。彼女は洞窟で一晩を過ごすことにしたが、朝に起きたら、彼女とエルトンと依頼されていた地図は消えていた。彼女が置いていったロボットの横に手紙があった。

ちゃんとお別れの挨拶をできなくてごめんね。でも、私の私有物をあげるよ。大事にしてね！使ってね！あなたは人工衛星観測者になるべき人物だよ。会った瞬間から感じていた。その代わりに、ロボット犬をいただきました。では、気をつけてね、人工衛星観測者！地図を一枚しかもらってないから安心してね。

紙をグチャグチャにした。それでも、起こるべきことが起きたと信じ、落ち着こうとした。でも、やっぱり私はまだイライラして怒っていました。幸い、彼女が置いていったロボットを使ってクライアントに事情を説明できた…

そこから、また一から砂漠の地図を作り始めた。日が経つにつれて、私は彼女の人工衛星観測道具をもっと使うようになった。気づいたら、私は通信先を探していて、砂漠より空を記録するようになっていた。知らぬ間に自分も人工衛星観測者になっていた。

出会った日に持って去った私の地図を返してくれた。
あなたがロボットのソフトウェアを更新した人なの？
エルトンと地図のことは本当にごめんね。でも、遅くなる前にここに連れてきたかったの。
逃げろって言ってきた。あの光のビームはどこから来たんだろう。
あなたに、ここに辿り着く前に死んでほしくなくて。
そういえば、衛星は何て言ってたの？
周りを見渡して、彼女に視線を戻した。ソフィアさんの顔の前で手を振ったが、彼女は固まっていた。そしたら、私の体が振動して、大きなバザー音が聞こえた。
ソフィア？

私たち、やっと繋がったね。
ソフィアはもうすぐ通信に繋がります... 本日まで生き残れた人は、ご先祖様の歴史を学ぼう...
人工衛星の原子バッテリーがもうすぐ無くなります。そしたら、必然的に戦争の相手がこの宇宙を吸収します。そして...
ソフィアも通信が聞こえたから動き出した。衛星に従った観測者たちは大災害の中心地だったオアハカに連れていかれた。
その地の脳に通信が直接送られ、それを忠実に聞けた人は大災害のこと、LAST DINOSAURSの音楽を地球に送った人工衛星のこと、そして世界の本当の歴史を知れた。
通信が終わったらソフィアは私を見た。二人とも外からゴロゴロが聞こえて、外に踏み出しながら私たちは新しい時代に突入したことを確信した。終わりの初めだが、まだ時間があるから希望もある。